



学生と教員が満足できる授業とは



教養教育主事
鈴木 勝久

毎年、学生にむけて授業評価アンケートが行われる。この中に、学生の理解度についての質問があり、その回答には必ず、

授業が既習の内容でつまらなかったという回答の一方、内容が難しすぎるとの回答がある。授業を聞いてよく理解できたと教員を喜ばず回答もあるが、少数である。受講学生を前に、授業の内容をどのようなものにするか、多かれ少なかれ教員が悩むことではないだろうか。すでに基礎的な知識のある学生には、さらに発展的な内容を教えたいが、そうでない学生にとっては理解できないことになる。よく言われるジョークに、“大学の講義を聞く学生は、三つのグループに分けられる。講義を聞かなくてもわかるグループ、講義を聞いてわかるグループ、もう一つは講義を聞いてもわからないグループだ。”というものがある。あながちジョークとばかりはいえない。教員側からこのようなことを教えたい、学ばせたいという内容と、学生側からこのようなことを学びたい、知りたいという内容がマッチすれば、教員、学生双方が満足できる授業が成り立つ。このことを考えたとき、ある大学の広報誌に載った写真を思い出す。それは、中東の街角の風景で、老人が地面にコーランを広げしゃがみ、その向かいに少女が座っている。老人がその少女に、コーランの教えを説明している。少女は真剣なまなざしで、老人の話を聞いている。ここには、教えたいこと知りたいことが一致した一対一の教育があり、まさに教育の原点を見る思いがした。

目次

1. 学生と教員が満足できる授業とは
2. 部局におけるFD活動の紹介
 - 経営学部公開授業報告
 - 環境情報学府公開授業報告
 - 工学部公開授業報告
 - 国際社会学研究科公開授業報告
 - 海洋空間のシステムデザインコース
JABEE 受審
3. 現代的FD考—キャリア教育の立場から
4. 国立大学協会大学マネジメントセミナー報告「愛媛大学におけるFDの取り組み」について
5. 講義で活用できるツールの紹介
6. FD推進部より

残念ながら大学の授業は、このようなわけには行かず、相当数の学生を相手にする。学生の基礎知識や興味のスペクトルは、受講生が多くなればなるほど広がる。必然的に学生の授業に対する満足度は低くなる。このことはアンケート結果で、授業満足度とクラス規模に弱いながらも逆相関があることにも示される。教養科目の受講者数は、様々な理由があるがバラツキが大きい。適正なクラス規模（規模については様々な意見があろうが）を確保し、学問の面白さを教え、学習意欲の向上につながる授業にしなければならない。また授業を聞くことにより、学生がさらに意欲的、系統的な授業選択をする場合に、それに応える開講科目の充実を目指すなければならない。有機的な科目の連携や、学習意欲を高める授業をどう作っていくか、組織的な議論や実践を行い、成果を教員共有のものとしていくことが、FD活動に求められているのではないだろうか。

部局におけるFD活動

経営学部公開授業報告：「経営科学総論」

経営学部 中村 博之

1. 平成19年度公開授業

公開授業は全学FD推進部会における重要活動の1つである。本年度も、例年通り、経営学部では公開授業を実施した。授業担当者として、昨年度、本学部でベスト・ティーチャー賞を受賞した松井美樹教授に今年度の公開授業を依頼した。実施は12月5日（水）に経営学部講義棟106教室において、4限の14:40より16:10という講義時間帯であった。当日は、「経営科学総論」の講義にて、多数の学生が出席する中、12名の教員が参加し、熱心に聞き入る中で公開授業として行われた。



2. 「経営科学総論」の講義

公開授業の「経営科学総論」については、講義要覧にて詳細なシラバスが提供されている。当日の講義はそれに示された日程通りに行われており、「整数計画」についての講義であった。講義方法としては、黒板のスクリーンにプロジェクターによりパワーポイント資料を映写して、教員が説明するという形式であり、学生に配慮してパワーポイント資料は出席者に配布されていた。当日の講義進行の流れは以下の通りであった。

- ① 当日講義の概要説明
- ② 教員によるパワーポイント資料に基づく講義
- ③ 出席を兼ねたクイズ（択一式）の実施

この進行は毎回同じとのことであった。学生は講義を熱心に聞いており、最後にクイズがあることもあってか、ノートを取りつつ説明内容について考えているようであった。また、パワーポイント資料は英語によって作成されているが、講義における整数計画に関する説明は全て日本語であった。

3. 公開授業によるFD研究会

当日講義終了後、場所を移して、公開授業の検討会が行われた。この検討会は経営学部ではFD研究

会と位置付けており、今年も公開授業に引き続き教員の積極的な参加があった。当日は、普段、他の教員の講義を目にすることがめったにないこともあってか、参加教員からは様々な質問、感想などがあった。さらに公開授業担当の松井教授からは毎回の講義においていかなる工夫を行っているか、参加者に対し有益な説明があった。当日は多くの質疑応答があったが、注目すべき点の概要を示すと以下の通りであった。

（質疑応答）

「資料、クイズとも英文による講義となることで学生の理解に問題は生じないか？」

→ 説明は全て日本語にて行うため問題は生じていない。期末試験も基本的には日本語の問題を出題している。

「講義で示したExcel資料は教室後列の学生には見えないのではないか？」

→ 教室設備の限界にて、この資料はWebにて公開し閲覧可能にしている。

「毎回のクイズなど、講義の付随的負担は大変なものではないか？」

→ 出席とクイズについては TA を活用することで対応可能である。

また、次のような感想が述べられた。

「盛り沢山な内容を説明しクイズまで行っているにも関わらず開始から終了まで時間管理が見事であった。」

「完全にシラバス通りに講義が進行している。」

「講義の冒頭で当日の講義内容の予定と要約を示すことで学生の理解を助けている。」

他にも多くの意見や感想があった。

4. FDとしての公開授業

通常、教員は自分自身が担当する講義について客観的に考えることは非常に難しいと思われる。毎期末の講義について実施する授業評価アンケートで教

員自身の講義方法について、学生の視点からどんな点が課題となるかを省みることは可能である。しかし、明らかとなった問題点や課題について、その具体的な改善策について考えることがより一層重要である。そのためには、他の教員の講義を目にすることは非常に参考になることが明らかであった。とりわけ、ベスト・ティーチャーとして評価された教員には、相当の工夫の跡が見られることが確認された。ただし、通常の講義の一部において公開授業を行うため、当日は、講義、ゼミ、校務などあり、一部の限られた教員しか出席できないという点は今後の課題であろう。とはいえ、このような活動自体は極めて意義深い試みである。今後とも、この公開授業を通して、講義方法について積極的に検討することとなり、効果的な授業による十分な教育へと結実していくことが期待される。



環境情報学府公開授業報告

環境情報研究院 大矢 勝

11月7日(水)3限「リスク社会論」大学院環境情報研究院 益永茂樹先生

大学院の公開授業は今まであまり行われていなかったが、今回は益永先生にお引き受けいただいた。授業は複数名で担当する科目で、その中の益永先生のご担当分の授業である。リスクにまつわる諸問題(1)として、リスク比較やリスク評価と管理についての講義であった。受講者は18人程度で、講義はパワーポイントを用いての説明が中心で、提示資料はプリントして学生に配布された。学生にアンケートを行い、すぐさまパワーポイントに反映させてのデータ提示などが織り込まれており、学生の授業参加に工夫がなされていた。最初出席者記入表に出席学生が氏名を記入し、その出席者名簿からランダムに学生を選び、その学生に対し質問を行っており、適度な緊張感が保たれていた。

授業の後、益永先生にQ & A形式で授業の工夫や今後の課題等についてお答え頂いた。



Q. 先生の授業を拝見しますと、学生に質問を誘導する形でされており見習うべきところが見受けられますが、何か工夫はされていますでしょうか？

A. 学生に対し質問をしていると、確かに授業の進行は遅くなりますが、できるだけ学生には授業に入ってきてもらうように心がけています。

Q. 今日の授業における、学生の反応はいかがだったでしょうか？また最近の学生の傾向はいかがですか？

A. この授業は3名の教員で担当しており、自分の最初の授業であったこともあり、今ひとつ学生の反応が悪かったように思いました。また、この授業で割り当てられた教室が、広いわりに受講者が少なく、学生が後ろの席に固まってしまうことも反応の悪さに起因しているように思います。最近の学生については以前に比べて教員に対し積極的に質問してこない傾向があるように思います。

Q. 今回の先生の授業は、パワーポイントをお使いになっていましたが、毎回パワーポイントを作成されて講義をなされているのでしょうか？

A. 基本的にはパワーポイントでの授業を行っています。ただ、他に受け持つ授業では、教科書を使用する場合があります。そしてなるべく宿題を課すようにしています。実際毎回の授業で資料を作成し配布すると、資料を作成せずにパワーポイントのみで授業を行うのとでは、どちらが学生にとって効果的なのか迷うこともありますが、資料や教科書を授業の前に紹介してしまうと、学生が真剣に授業に参加しない面もありますので、今年はパワーポイントのみで行うことにしております。

Q. 毎回出席はとられるのでしょうか？

A. 毎回、出席をとっています。今回は学生に質問を行うために授業の最初に出席をとりました。

Q. 今後の課題等がありますか？

A. できるだけ学生に参加してもらうように、更に工夫をしていきたいと思っています。

授業方法として特筆すべき点として、パワーポイントをうまく活用した質問方法が挙げられる。投影資料上では四角枠の中に「なぜ、自発的リスクにまで介入するのか？」といった質問が書かれており、そこで学生に考えさせ、幾人かの学生に発表させる。その後、マウスをクリックすると四角枠に解答が出るようにし、学生はその解答をノートするというものである。適度に学生の緊張感を保ち、パワーポイントを利用した授業でありがちな、学生の受身的な授業の雰囲気が一掃される。是非とも多くの方に取り入れてもらいたい手法である。但し、学生に配布する資料用には四角枠に解答ではなく質問のみが表示されるパワーポイントファイルを別に準備しなくてはならない点は面倒である。授業直前に訂正したい場合などを想像すると気が引ける。何か良い方法はないのだろうか。



工学部公開授業報告

科目名：鉄筋コンクリート構造・演習（工学部建設学科3年後期選択必修科目）

教員：田才 晃 教授

日時：平成19年11月26日8時50分～10時20分

場所：工学部講義棟 A305 教室

当日のテーマ：「耐震鉄筋コンクリート構造」

授業出席学生人数：30名～35名程度

公開授業聴講者人数：4名（教員2名＋教務課2名）

工学部FD委員長 小川 輝繁

授業の様子

- ・ 黒板, OHP および液晶プロジェクタを使って説明
- ・ 学生が習得しなければならない知識量が多いので, プリントを作って配布
- ・ 説明の順序は, まず結論を言って, 結論を誘導する過程を解説
- ・ 阪神・淡路大震災の被害事例, 最新の技術を使った建設現場の事例, 研究室での実験などの写真, ビデオを OHP や液晶プロジェクタで示して説明
- ・ 説明の口調はゆっくりと聞き取りやすい (発声法や話す速度はテレビのアナウンサーの話し方を参考にしているとのこと)
- ・ ときに, 教壇を降りて学生の机の元で語りかけながら進める
- ・ 重要なことは繰り返し説明
- ・ 重要な式については, 誘導法を丁寧に説明
- ・ OHP, 液晶プロジェクタの操作および出欠管理に TA を活用



意見交換会：授業終了後, ~11時30分

田才教授より, 授業方針, 授業の進め方等の説明の後, 質疑応答を行った。田才教授の説明の概要は下記に示す。

- ・ 担当授業の位置づけ

建築の学生は一般的にデザインの分野に憧れているので, 当該科目のようなエンジニアリングの分野は学生の興味から外れているが, 建築の分野では非常に重要な科目であるので, 建築学における科目の重要性と学生の意識のギャップを考慮して授業を行う必要がある。幸い, 耐震偽装問題があったため, 学生も興味をもって聞いている。

- ・ 科目の特性の考慮

鉄筋コンクリート構造の設計方法を教えているため, 学生には馴染みやすい反面, 学部課程で習得すべき知識量が膨大である。そのため, 後で役に立つような充実した資料をテキストとして提供するが, テキストにあることだけを単調に教えないようにし, 枝葉末節なことまではやらない。一方, 力学に沿った内容はきちんと教えている。資料だけ与えるのではなく, 理解させる必要があるため, 絵が抜けたプリントを配り, 授業中に説明し, 書かせて理解させる。

- ・ 出席の管理

出席は厳しくしている。出席した時間によって異なる出席簿をおいて, 学生本人に記名させる。授業開始後 10 分までと 30 分までと区別し, 後者には評価点のリダクションを行う。30 分以上遅刻した学生には出席簿は書かせず, 資料の配布も行わない。出席の代筆の防止など出席簿の管理は TA の協力が不可欠である。

- ・ その他

授業中, 寝させないように大きな声でやっているが, どうしても寝る学生はいる。興味をそらさないように, 授業のテーマから外れるが, 地震防災の調査の話などを織り交ぜている。配布するテキストの図の部分空白にしておき, 板書に図を書いて学生に写させるようにしている。

全学統一の授業評価アンケートは項目がまとめられているため, 学生の考えがいまひとつ伝わっていないため, 記述形式の独自アンケートをとって, 参考にしている。何人か同じことを指摘する場合は, 次の授業で改善するようにしている。

科目名：高分子化学II（工学部物質工学科3年後期選択必修科目）

教員：渡邊正義教授

日時：平成19年10月30日13時～14時30分

場所：工学部講義棟A106

当日のテーマ：「合成高分子でどこまで出来るか？」

－ハイドロゲルを例にして－

工学部FD委員 富井 尚志

1. 授業の様子

この授業は、物質工学科の3年生を対象とした科目で、二つの大講座の学生が履修可能な選択必修科目だそうです。工学部の3年生の時期というのは、次年度からの卒業研究を控え、その後の大学院への進学も視野にいれるという、ちょうどこれから研究に臨む時期にあたります。したがって、高分子の研究分野に関する基礎的な話題を中心とした授業を行って、研究に興味をもつきっかけとなるようにすることを心がけておられるそうです。履修する学生にもその主旨が伝わっているのか、60名～70名程度と多くの学生が出席していました。



授業の進め方は、あらかじめ配布されたプリントを基に黒板に書きながら解説するスタイルでしたが、とても参考になる特徴的な点がいくつかありました。

まず一番の特徴として印象に残り易いのは、授業の内容を「実験」してみせておられた点です。公開授業として参加させていただいた回は高分子物質「ハイドロゲル」に関する話題が中心でした。この物質が実際に使われている身近な例として「紙おむつ」を挙げ、その内容物と同等の「ハイドロゲル」が詰まった小瓶サンプルを授業中に回覧されておりました。学生が一通りサンプルを見た後、授業内で説明された内容、すなわち、実験1：「高吸水性樹脂2gに、100gの水を吸収させる」→まぜると固まる、実験2：「吸収させたものに、食塩を加える」→まぜると融ける、といった実験をされていました。学生にとっては、今、説明されたことがすぐに目の前で現象として確認ができることとなります。学生の様子を見ると、実験に対する注目は非常に高いものでした。

加えて、より印象に残った点は、ときに教壇を降りて学生の机の元に歩み寄り、直接語りかけながら授業を進めていたことです。その語りかけの中に数回、学生自身に自分で考える時間を与えていました。

「考えてほしいんだけど」、「理由を考えよ」、「周り相談してよいから」、と言われた学生は、それぞれノートやプリントを参照したり相談しながら、ときには渡邊先生からヒントをもらって誘導されるように、考えをめぐらせている様子でした。その後、黒板に主に図を描きながら、ゆっくりとした聞き取りやすい口調で答えを解説されていました。また、極端に専門的な言葉ばかりを使わず、特に数式については、高校化学程度の知識でも理解できる言葉に噛み砕き、式の示す意味・概念を丁寧に解説されていました。多くの学生は真剣にノートをとっている様子でした。

2. 意見交換会

授業終了後、公開授業の聴講を行った教職員で渡邊先生を囲んで意見交換会を行いました。以下はその際の主なやりとりです。

—学生が真剣にノートを取っていましたが、ノートをとるモチベーションを持たせている方法は？

渡邊：分かりやすく、ノートをとってれば復習しやすい板書をするように心がけています。教科書は指示せず、プリントを配っています。また、アップツーデートの内容の英語の論文を翻訳させるレポートを課して、日本語の資料を基にまとめさせています。

—今回実験をされていましたが、どのぐらいの頻度でなさるのでしょうか。

渡邊：実験とデモ（サンプルの回覧）を合わせると授業7～8回のうち3～4回はやっています。この講義では実験をとり入れやすいのですが、実験をすると学生は興味をもってくれます。

—学生に直接語りかけるスタイルをとっていますね。

渡邊：前のほうにいる熱心な学生だけでなく後ろのほうの学生にも語りかける必要があるのですが、

（後ろのほうの学生は）ノーレスポンスなので語りかける対象はどうしても前のほうだけになってしまいます。しかし、全員無視ではなく反応してくれる学生がいるので語りかけることができます。

—高校の化学でもある程度理解できる話に噛み砕いていて、モチベーションをあげる工夫が見られました。

渡邊：式を出しても全然ついてこないのも、専門性重視にはしていません。したがってこの講義はあまり不可はつきません。アップツーデートの内容なので、試験ではある程度の点数は取ってくれています。授業の成果としてレポートを提出させて、それにも点をつけています。

—準備や採点にかかる時間は？

渡邊：結構かかっています。特に試験では論述問題も課するので、大変です。

—この講義は何年やっているのでしょうか？

渡邊：スタイルは少しずつ変えていますが、10年はやっています。教科書はまだ作っていませんが、50ページくらいあるプリントを配っています。

—この授業を聞いたから研究室に来た、という学生はいましたか？

渡邊：多くいると思います。研究に近い話ができるので、学生は面白がって聴いてくれます。学生が話題についてくれる高分子化学(II)は授業がやりやすいです。ただ、数式が出る理屈的な講義は評価が低く、「化学漫談」風の講義のほうが評価は高くなります。しかし「化学漫談」風の講義は、聞いたときは分かった気分になるのですが、終わると頭に残らないと思います。したがって、（電気化学のような）基礎の講義は正攻法でやるしかないと思っています。

—来年はぜひ電気化学の授業を聞かせてもらいたいと思っています。基礎的な内容をどういう形でやっているかをみると、高校とのギャップを見ながらの講義のやり方を見られるので。

渡邊：式を出す講義では、式の意義を日本語で説明するのに時間を置いています。また、前の年の試験（過去問題）を勉強用に配っています。学生がまじめなので試験勉強をよくやっていて試験成績は良いのですが、内容が分かっているかどうかは別です。覚えていることよりも、概念を理解していることが重要です。研究室でも、成績がいいのに理解はしていない学生はいますので。

3. 全体の感想

受講している学生はこれから研究に臨む時期にあたります。したがって、基礎的な話題を中心に言い、研究に興味をもつきっかけとなるように意識して授業をされていた点は、受講する学生と研究指導を行う教員の相互に有意義であることが再確認できました。また、授業では数式も出ていましたが、その式の意味や概念を考えさせることに主眼を置いて丁寧に解説し、あとから使えるように板書することを心がけておられる、という授業姿勢がよく分かりました。これら全体を踏まえて、学生に自らが考えるモチベーションを与えることを実践されている授業としてとても参考になりました。最後に、お忙しい中で意見交換にお時間を割いてくださった渡邊先生に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。



国際社会学研究科公開授業報告

国際社会科学研究科 梶島 洋美

1. 概要

平成 19 年度の国際社会科学研究科の公開授業は、吉村政穂准教授の「法人税法研究」であり、当日のテーマは「組織再編税制（イントロダクション）」であった。当日は、教員の出席率が思わしくなかったため、90 分の授業後に設けられる懇談会に代えて、国際インタビュー形式で授業方法などに関する聴き取りを行った。

2. インタビューの内容

Q. 本授業の目的は何か。

A. 法人税法の高度な仕組みを理解することであり、特に実務における税制の理解を主眼とするものである。そのため、講義形式で進めながら、ときに学生による研究内容を報告する回を設けている。

Q. 授業目的を実現させるための方法として配慮していることは何か。

A. 本授業は、前期に租税法を受講したことを前提に開設されているものであり、具体的な判例や制度に関して解説することを中心に進めている。条文にあたり、どのような場面でどう適用するかなど、具体的事案を考える訓練の場として授業を構成しているつもりである。

Q. 授業を行うにあたって工夫している点はどのようなことか。

A. 学生が興味を持つよう、法改正に関する仕組みや具体的事件を取り上げている。

Q. 昨年度までの同授業と比べてどの程度、内容の更新を行っているか。

A. 法改正などもあるため、授業内容は少なくとも半分程度は更新していると思う。

Q. 学生に対する評価はどのように行うか。



A. 学期末のレポートと授業時の報告の出来による。

Q. 授業を進める上で難しいと感じている点は何か。

A. 学生に報告させる場合は、報告後に議論する場を設けることによりさらに考察を深めさせたいと思っているが、本授業を受講している学生の数（5人）からして活発なディスカッションまでもっていきこうするのはなかなか難しい。また、本授業は前期に開講している租税法を受講していることを前提にしているが、実際には税理士等、実務家として活躍し、専門知識をもっている学生もいれば初学者に近い学生もいるというのが現実で、どこをターゲットにするかは悩ましい問題である。さらに本授業は、ときに会社法など私法の知識も要求される分野なので、それについても受講者の知識の程度と限られた時間との関係でどこまでしゃべるべきかということで苦慮している。

Q. パワーポイントは使うことはあるか。

A. 基本的には、授業のときに配付するレジュメと板書によって説明をし、パワーポイントは使わない。本授業は解説と学生からの質問に対する返答を行っていくなかで利害関係や仕組みを図で表す必要

があるため、パワーポイントを利用するよりも板書したほうが適切だと思う。

3. おわりに

大学院の授業では普通に見られる光景だが、本授業も1時間目に開講されているにもかかわらず受講者全員が8:50には着席して授業を受けることのできる体制になっており、授業開始後も90分間集中力を切らすことなく熱心に聞いていた。このような現場ができあがるためにはいくつかの理由があるだろうが、今回のように吉村准教授が組織再編税制などタイムリーな内容を授業に取り入れたり、手作りのレジュメを配付したりするなど地道に工夫しているこ

とは、授業のムードづくりに大きく影響していると思われる。

残念だったのは、当公開授業を見学する教員が殆どいなかったことである。国際社会科学研究科の法学系（法曹実務専攻と国際関係法専攻）では、毎年一定期間、すべての授業を公開の対象とし、教員が相互に授業方法について勉強する機会を設けているため、今回国際社会科学研究科から見学に来る教員がいなかったことはある程度理解できる。ただ、今回は国際社会科学研究科の教員だけではなく他の部局にも開かれていた。何のために全学に向けて公開にしているのか、果たして全学一斉公開が有用なのかについては今一度検討すべきではないのかと思われる。



海洋空間のシステムデザインコース JABEE 受審 — 理念無き制度改革への危惧 —

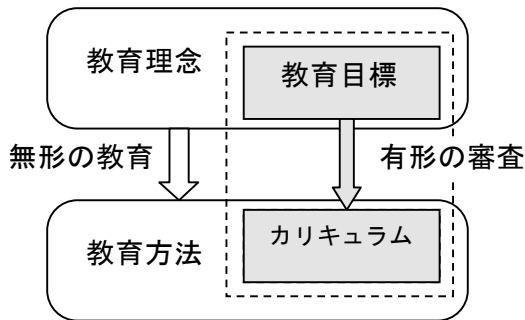
建設学科 上野 誠也

建設学科海洋空間のシステムデザインコースは、2007年11月に日本技術者教育認定機構（JABEE）の実地審査を受けた。報告と共に個人的な感想を述べたい。当コースは船舶海洋工学と航空宇宙工学が融合した特殊な教育方法を採用している。卒業生の質が外部から保証されることで、当コースの特殊性を補強する目的があった。コースの独自性をアピールすることも狙って実施に踏み切った。当然のことながら、当コースに適した分類はなく、「機械および機械関連分野」で受審することになり、不利を覚悟の上で実施を選択した。

JABEE受審を2005年秋に教室の方針として決め、審査のために準備を開始した。教育水準を示す試験答案の保管や卒業研究を行っている学生の勉学時間の調査などを行った。幸いなことに審査員経験者が教員内にいたことから、適切なアドバイスにより効率よく準備は進められた。しかし、自己点検書の執筆作業は膨大なものであり、執筆担当教員への負荷は尋常ではなかった。教育の時間に影響が出るほど

の準備作業が必要となっている。唯一良かった点は、教員と職員による教育に関する会議を開始したことである。約2年間で8回の会議が開かれ、教育に関する共通認識を高める場ともなった。

審査結果は自らが予想したほど高くなかった。外部から見るとカリキュラムや文書類に抜けがあるのが見えるようだ。その点を指摘されたのはプラスの成果とも言える。しかし、本当にそうなのだろうか？我々は、教員内に共通して持たれている理念の下に生み出した教育方法で学生を育てている。理念や方法は全教員が共通して持つことができる無形のものである。それを明文化して、有形の教育目標を書き上げた。教育目標の表現が不足するところは、学生と接することで補っている。ところが、審査員には有形の教育目標の文書しか目に触れることがなく、それとカリキュラムとを比較した評価を行っている。



当コースの教育方法は、船舶海洋工学と航空宇宙工学の2分野を融合した独自性を主張し、実践主義

をベースに築き上げている。新たな分野が異分野の狭間に生まれることはどの時代でもあり、それが人類の発展に繋がっている。ところが、画一的な基準で物事を縛っては、生まれるべき芽が摘まれてしまう危惧がある。これは有形の制度だけを導入して、無形の理念を理解していないという過ちから生じる。同じ過ちを教育に繰り返していないか。シラバスは何のために、GPAは何のためにある制度なのか。制度だけを導入して、理念を忘れてはいないだろうか。最近、FD活動を通じて、制度の裏にある理念に触れる機会が増えた。多くの方に理念を理解するためにFD活動を活かしてもらいたいと考えている。

平成19年度 「FDシンポジウム」のお知らせ

本年度も下記のようなスケジュールでFDシンポジウムを開催いたします。今回は、現在中央教育審議会大学分科会で審議されている学士教育の再構築で求められるFD活動や、実践的なFD取り組み事例について、学内外から講師をお招きして実施します。それぞれ、貴重な内容のお話が伺えるものと、大いに期待しております。本学教職員の皆様に奮ってご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

・日時・場所：平成20年3月7日（金）13時～17時・大学会館4階ホール

・講演題目（講師）

「FD制度化の背景と大学の対応」

（広島大学高等教育研究開発センター長・山本眞一教授）

「研究大学におけるティーチングアシスタントの役割」

（東京農工大学大学教育センター・小笠原正明教授）

「横浜国立大学における実践的キャリア教育-現代GPによる取組-」

（横浜国立大学大学教育総合センターキャリア教育推進部・居郷至伸講師）

現代的FD考ーキャリア教育の立場から

教育人間科学部・キャリア教育推進部兼務 新谷 康浩

キャリア教育とFDはつながるのか？

FD部門長の杉村先生より、キャリア教育についてニュースレターを書かないかとの依頼を受けたとき、正直少し戸惑った。FDといえば授業テクニック向上と受け取られてきたといってもよい。授業テクニックとキャリア教育はそもそも結びつかないのではないか。

とはいえ、本来のFDの意味合いは、(Faculty Development)であり、素直に訳せば大学教員集団の資質向上である。FD制度導入の経緯に詳しい有本章氏によると、米国では授業評価などの狭義のFDからより総合的な問題に活動が拡大したという。このような広義のものとして捉えるのであれば、キャリア教育もFDとつながるのではないかと考え、執筆を引き受けた次第である。

本学のキャリア教育について

近年多くの大学でキャリア教育への取組が盛んになっている。本学では、今年度現代GP実践的総合キャリア教育の推進に本学の事業「横浜・協働方式による実践的キャリア教育」が採択された。これは、平成18年度に本学が開発した「キャリアデザインファイル」をつなぎ手として、学生が自律的に学習し人生を設計するための仕組みづくりを行うものである。この取組内容について各教員に認知してもらうため、FDの一環として各学部教授会の前に説明の機会を持たせていただいた。

教授会でのFD活動について

各学部の教授会開催日にキャリア教育推進部のメンバーが開催場所に出向き、特任教員の居郷より本学のキャリア教育について説明を行った。(経済学部12月3日(月)、経営学部12月10日(月)、工学部12月17日(月)、教育人間科学部12月19日(水))通常、説明会を単独で開く場合、関心のある一部教員のみが参加している。他大学の事例をみても、いかに多くの教員にFD活動に参加してもらうかが大きな課題となっている。今回教授会の場をお借りして説明したことにより、多くの教員に説

明ができたのではないだろうか。とはいえ、こちら側から一方的に説明することがFDでもない。この活動がどのようにFD活動となるのか、私なりに考えてみたい。



学部教授会での説明

教授会でのFDを終えて

説明後にさまざまな意見が出された。とくにキャリア教育科目について危惧している意見があった。キャリア教育推進部では、現状のキャリア教育科目では不十分だと考えており、来年度以降に新設科目を含めたキャリア教育科目の体系化を目指している。そのためには、より多くの授業科目をキャリア教育科目として挙げていただきたいと考えている。

このように意見を出してもらうことは、よりよいキャリア教育をめざすためにも、FD活動の推進のためにも必要なことであると思われる。全学レベルでのキャリア教育と学部主導のキャリア教育の緊密な連携のためには、闊達な質疑応答を通してキャリア教育に関する知の共有化が求められる。そういった意味でも、今後ともキャリア教育に対してさまざまな意見を出していただきたい。それが、意図せざる結果として特定教員のバッシング道具にもつながりかねないという負の側面を打開する新たなFDのあり方にもなると考えている。

国立大学協会大学マネジメントセミナー報告 「愛媛大学におけるFDの取り組み」について

学務部教務課長 中島 庸介

はじめに

11月15日に開催された、国立大学協会主催の平成19年度大学マネジメントセミナーに出席し、FDの先進事例として愛媛大学の取り組み発表があったので、その概要を紹介するとともに、本学のFD活動にどのように応用してゆくかの点についても、言及してゆきたい。

取組概要

1) FDの定義

FDの定義として、教育・学習効果を最大限に高めることを目指した

- ① 授業・教授法の改善（マイクロ・レベル）
- ② カリキュラムの改革（ミドル・レベル）
- ③ 組織の整備・改革（マクロ・レベル）

の①～③のレベルまでを取り扱うことを、平成19年に教育・学生支援会議において決定した。

2) FD担当組織

FD担当組織は、図1に示すような位置づけで、平成18年4月に教育・学生支援機構の中に教育企画室を設置して業務を行っている。教育企画室の設置目的は、機構長の指示の下、愛媛大学の教育に関する諸課題について調査・研究を行うとともに、その成果を実際の教育活動に適用し、本学の教育改革を推進することである。主な業務としては①全学的な教育課題に関わる調査・研究、②FD（教員研修）、SD（事務職員研修）、TAD（TA研修）、③授業評価及びシラバス、④学生の学習を支援するシステムがあり、スタッフ構成は兼任教員の室長のほか、専任教員2名、兼任教員6名、事務職員6名で構成されている。

3) 授業方法の改善

授業方法の改善の展開としては

初期（平成11年度～13年度）講演会／シンポジウム・大人数啓発FD



中期（平成14年度～15年度）ワークショップ・少人数能力開発型FD

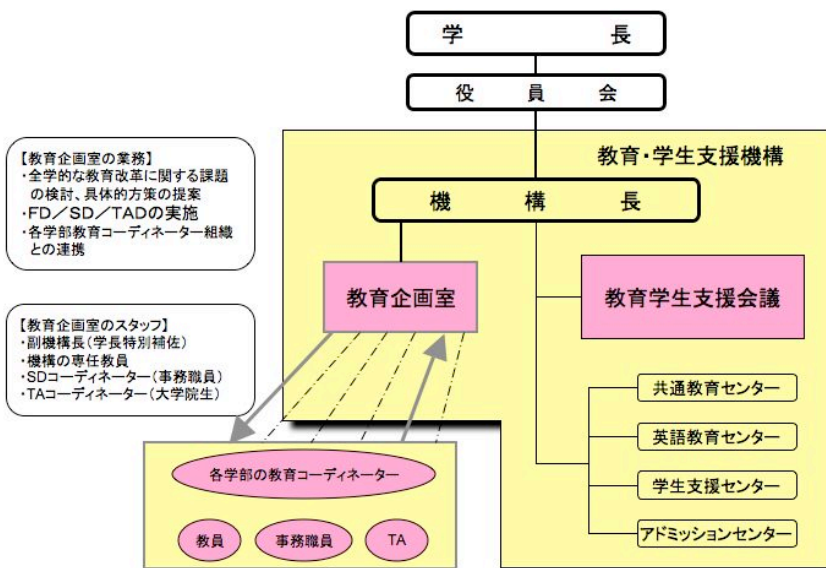


後期（平成16年度～）授業コンサルテーション・個別支援型FD

と変遷している。

また、持続的発展型の能力開発として、“習得する立場から指導する立場に”をコンセプトに、レベルⅠ（導入）、レベルⅡ（基本習得）、レベルⅢ（応用・発展）、レベルⅣ（創作・発展）、レベルⅤ（支援・指導）の流れで、別表

FD担当組織



別表1

FD	SD	TAD
新任教職員研修オリエンテーション		TA研修(共通教育) TA研修(専門教育)
FD/SDセミナー		
教育改善のための学生とのワークショップ		
教育ワークショップ	新人研修プログラム 接遇マナー研修	TAワークショップ
FDスキルアップ講座		
授業コンサルティング・サービス 公開授業	中堅職員研修 (プロジェクト研修) SDスキルアップ講座	スタディ・ヘルプ デスク実習
教育実践 シンポジウム発表	教育学生支援部 タスクフォース	
大学教育実践ジャーナル投稿		
教育ワークショップ講師 FDスキルアップ講座講師 授業コンサルタント ファカルティ・ディベロップメント講座	SDスキルアップ 講座講師	TAコーディネーター 研修

別表2

FDスキルアップ講座(2007)

	前半(13:00-15:00)	後半(15:30-17:30)
8/28(火)	視覚障害学生に対応した 授業方法	研究室運営方法のコツ ～自然に先輩が後輩を指導するようになる
8/31(金)	グループ学習のコツ	レポートの書き方の教え方
9/4(火)	FDフィードバック講座	パワーポイント入門
9/7(金)	ビデオカメラ不要! 超簡単動画教材作成法	誉め方、叱り方のコツ
9/11(火)	大人教養法の基礎	良いシラバスの書き方 ～授業デザイン入門～
9/14(金)	Adobe Premiereを使った 動画教材作成法	Eラーニング入門
9/18(火)	動機の低い観衆に聞かせる方法～なぜ私の話を聞いてくれないのか～	
9/21(金)	ループリク評価を作ろう	教員のための話し方講座

1のようなプログラムをFD, SD, TADごとに実施しているほか、別表2のような目的別のスキルアップ講座を開催している。

4) カリキュラム改善

教育・学習効果を最大限に高めることを目指した、学部・学科あるいは課程・コース等において提供されるカリキュラムや教育プログラムをより良いものにするため、カリキュラム・教育プログラムの現状診断、実施運営、評価、再開発の取組、また、これに関わるセミナー等を実施している。

5) 組織整備・改革

教育・学習効果を最大限に高めることを目指した、組織構造や組織間の関係をより機能的なものにするため、教育や学習支援に関わる組織の現状診断・評価・改廃のほか、学士課程の体系化を目指して、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー策定と一貫性構築への提言を検討している。

まとめ

本学では、大学教育総合センターにFD推進部を置き、初任教員研修・大学教育改革シンポジウム・FD合宿等の研修事業、学生による授業評価アンケートの実施、及び本年度からFDの普及啓発事業としてニュースレターの刊行等の諸事業を行っている。



推進部の構成は部門長の他、1名の兼務教員と7名の部会委員ということもあって、実行上は委員会方式で運営しているというのが実態である。そのような体制にあって、愛媛大学から何を学び、何を取り入れるかということ、まずは、FD推進部で本学のFDの定義づけを行い、FD推進部の機能と部局の機能の明確化を図り、部局のFD活動についてはFD推進部が策定したガイドラインの基で、全学的なFD活動の一環として取り組む必要がある。

大学院設置基準の改正により、今年度からの大学院FDの義務化が、来年度には大学設置基準の改正により学部にも拡大されることは周知のことであるが、それに伴う措置として、文科省からFD事業の予算化が図られることになっている。この資金の有効活用を図る観点からも、ガイドラインの方針に従ったFD活動の充実が望まれる(FD事業の予算については、予算査定時に予算化が見送られた)。

このガイドラインに学生による授業アンケートの実施が単に個別の授業改善からミドルレベルのカリキュラム改革の実現、マクロレベルの組織の整備・改革については、授業評価等を全学的に教員評価に導入することの提言を盛り込むことでFDの活性化を図ることも検討したい。

『わたしの工夫』欄 原稿募集中!

FDニュースレターでは、教員の皆さんからの授業におけるちょっとした工夫や学生の注意を惹き付けるコツなどを募集しています。掲載にあたっては記名/匿名のどちらでも結構です。詳しくはメールで下記まで。

教務課大学教育係 : kyomu.kyoiku @ nuc. ynu. ac. jp

講義で活用できるツールの紹介

教育人間科学部 金馬 国晴

学生各人の携帯電話を直接の媒体として、連絡網や質問のやりとり、出席確認、アンケート他ができるシステムを、数名の本学教員で試行しています。

ご関心がおありの先生方に、試しに登録して活用してみませんか、という案内をさせていただきます。

●使用の基本的なパターン

1. 登録・使用を希望する先生には、講義の基本情報を管理人（今年度は私金馬）に連絡して頂きます。
2. 管理人より「学生用マニュアル」を添付ファイルにてお送りしますから、履修人数分を印刷して、講義中に学生に配布してください。（「先生用マニュアル」もお送りします。）
3. 講義中（または後日）に、学生各人が、そのマニュアルにしたがって、自分の携帯電話からこのシステムに登録する手続きを行い、続いて各科目の登録も行います。
（一度システム登録を完了した学生は、各科目の登録のみを行えばいいことになります。）

●本ツールでできること。様々な活用

その後、教員と学生との間や学生相互で、以下のようなことが可能となります。

- A. 「連絡網」・・・教員からは学生全員へか一部の学生へ、または各学生からは教員へか学生全員へ。例えば、宿題、持ち物、急な教室変更・休講などについて。各グループへの連絡など。（字数制限あり）

※学生のEメールアドレスは教員には一切伝わりません。学生の個人情報が保護され

た状態で、教員から登録学生の全員一斉に、または必要な個人・グループに、連絡等を配信できます。

- B. 「質問・課題提出」・・・学生個々人から教員に質問・課題が送信でき、教員はその学生または学生全員に向けて回答ができます。

教員はさらに、パソコン上で、学生の質問・課題を一覧にして確認できます。

※学生には、互いのEメールアドレスはわかりませんし、教員のアドレスもわかりません。参加者全員の個人情報が保護されます。

※学生にも全員の質問内容が閲覧でき、また教員からの回答を閲覧できます。

※各学生は、ニックネームを互いに使用することができます。教員のみが、ニックネームから学生の本名と学籍番号を確認できます。

- C. 「出席管理」・・・講義室に来た学生に、携帯電話で出席メールを送信させた後、教員はパソコンで集計ができます。紙の出席カードがいない上に、出欠の一覧表も作成できます。

- D. 「小テスト」・・・授業内で、または宿題として行い、その集計、管理もできます。

小テストに関するコメントも、個別にあるいはグループごとに返信できます。

- E. 「リアルタイムアンケート」・・・履修学生に、授業内で、または宿題としてアンケート調査を依頼し、その集計も簡単にできます。ノートパソコンやプリンターの持ち込んだり、いったん研究室に戻ってパソコンで集計・印刷をすれば、集計結果をその授業内で投影や配布をすることもできます。

F. 「検索」・・・以上のデータについて、特定の学生や各種の項目に絞って、検索・一括表示もできます。学生ごとの年間追跡もできます。

※以上について、携帯電話を持っていない学生は参加できません。また、教室が携帯電話のつながりやすい電波環境であることが前提にはなります。

とはいえ、同じことがパソコンでもできるため、携帯電話がない・つながらない学生も、パソコンを通じて参加できますし、パソコン室では、受講者全員が登録済みであれば、全員が当システムを活用できます。

●教員としてのメリット

まとめますと以下のようなこととなります。

・これまでの簡易メーリングリストによる連絡網と違い、教員が各学生のアドレスを知る必要もないし知ることができません。学生の長々としたメールアドレスを、教員が一々入力する必要もありません。

※ただし、アドレスを変更した学生は、自分で変更手続きをする必要があります。

・パソコンにて、質問のやりとりの集約、出欠の集計、アンケートや小テストの集計・分析ができます。

※情報を、表計算ソフト（エクセル、ロータス他に csv ファイル形式で）や集計表、円グラフに簡単に変換できる機能があります。

・やりとりや集計の結果、出欠データ他は、一年間は保存できます。

以上、システムとしてはまだ試行中の部分もあるのですが、それだけに柔軟な活用に応じられるものとなっております（株式会社エネックスの「エシリス」という商品をモニターの的に利用させていただきます）。

慣れてくれば、講義のねらいや内容、形態に合わせて使いこなす楽しみも感じられてきます。

パソコンや携帯電話にあまり慣れていない方でも、気軽にご活用下さいませ。

※ 問合せ、登録の申込みは、今年度の管理人で本稿の執筆者、教育人間科学部金馬国晴（きんまくにはる）までお願いいたします。

kinma@ynu.ac.jp 090-1318-6688



編集後記

今号は、各部局で11-12月にかけて行われた「公開授業」についての報告の特集です。

各先生方の授業に対する工夫が、分野の違いを反映した特色ある内容となっており、読者を飽きさせない記事となっているのではないのでしょうか。また、それぞれの報告には今後のFD活動への貴重な提言も含まれておりますので、是非ご一読下さい。

教養教育主事、鈴木勝久先生からいただいた巻頭言からは、個々の授業に対するアンケートだけではなく、今後は学生が望む授業の体系・カリキュラムにまで踏み込んだアンケート調査が必要かも知れないという思いが伝わって来ます。それは、今回原稿をいただいたキャリア教育の推進とも密接に関係してくるものと思われまます。

来年度は大学院に引き続き、学部におけるFD活動が義務化されます。それ相応の予算がつく可能性もある中、中島教務課長の寄稿にもありますように、より一層のFD活動の推進が求められます。さらに各部局におけるFD活動の紹介記事も含め、皆様のご協力に感謝申し上げます。本年もよろしくお願い致します。

FDニューズレターWG（工学部兼務教員）
君嶋義英

行事日程

平成20年1月中旬

「学生による授業評価」アンケート後期分

平成20年2月

アンケート結果配布・自己点検票の提出

平成20年3月7日（金）13時より

平成19年度横浜国立大学FDシンポジウム



本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

FD at YNU ニューズレター No. 3

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニューズレター・ワーキング・グループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp

発行／平成20年1月 発行